

武田雅哉『中国乙類図像漫遊記』大修館書店、2009年

王様は、裸なのであります

後藤正憲

中国文学の古典から現代までの膨大な資料からエキスを抽出して、読者に伝えるエキスパート——そんな武田雅哉氏が世に送る近著が、『中国乙類図像漫遊記』である。視覚的に捉えられる図像、しかも、およそ芸術的価値の認められることのないと思しき図像をテーマにした本書では、その中で取り上げられる資料媒体（メディア）の多彩なことに、まず驚かされる。ざっと取り上げてみると、清末の絵入り新聞から、漫画や劇画に相当する「連環画」、アニメ、「年画」や「農民画」といった範疇のポスター、辞書や小説に挿まれたイラスト、それに「安全な電気の使い方」を図解した指南書までが、次々と読者の目の前に提供される。読者はあらためて、中国の近現代史の中で図像が担ってきた役割の重要性に気付かされるだろう。本書の中で筆者が指摘するように、日本の巷では、「文字はえらくて、絵はえらくない」というような傾向（p.131）がよくみかけられるのだが、むしろ内容が正しければ、絵という媒体を通して誰にも分かる形で、それが広まることが求められるということだってありうるのだ。

しかし、図像が大いに活躍する中国近現代史の特徴もさることながら、そうした図像に着目する著者の視点も、大きく取り上げられなくてはいけない。先のような指摘をするからといって、彼が絵と比べて文字を軽視しているわけでは断じてないということは、すでに15年も前に『蒼頡たちの宴—漢字の神話とユートピア』（1994年、筑摩書房）というすぐれた著作があることからしても、言うまでも無い。むしろ、あえて芸術的価値を持ちそうにない図像に着目することによって、著者は凝り固まった通念を、ことごとく相対化してみせる。

これまでの自著に引き続き、彼はあらゆる対立的構図をバランスよく捉えるための目配りを怠っていない。その敏感な視線の先には、互いに背反しながら隣接するもの同士が、その接合面において互いの侵蝕を受けながら成立する二項の関係がある。前述『蒼頡たちの宴』では、それは普遍言語をめぐる奮闘する西洋と東洋の関係であったし、また『楊貴妃になりたかった男たち』（2007年、講談社）では、衣裳を介して入れ代わる男と女の関係がクローズアップされていた。本書では、章ごとにそれぞれ異なる種類のテーマが設定され、その都度さまざまな対立関係が取り上げられている。例えば、日本における「孫悟空」の受容と、中国におけるディズニーや日本発アニメの受容に見られるような、日本と中国の相互関係であったり、上海浦東地区のビル群が具現するような未来都市像やロボットなど、近代化の予想図の中に見られる旧いものと新しいものの関係であったり、児童教育用の教材に描かれる、道徳的な善と悪の関係であったりする。こうした対立するもの同士の真ん中に、著者はこっそり鏡を置く。すると、これまでまったく相いれない対立項と考えられていたものが、実は鏡に映った互いの姿と極めてよく似ていることが判明するのだ。

こうした鏡像的で、相互侵蝕的な対立関係のうち、著者がこの本を通じて最も力点を置くのが、真と偽の関係だろう。私たちの日常においては、さまざまなもののコピーが氾濫し、一方ではその恩恵を受けていながら、特定のケースでは偽装を厳しく糾弾するということが、頻繁に行われている。「つまりはウソのつき方にも、なにかしらの決まりごとがあるということなのでしょう、まったく人間とは、不思議な生き物であります」(p.253。本書「あとがき」より抜粋)。確かに、日本で公開される「孫悟空」のウソに中国側が反発し、中国で消費される日本発アニメのウソに日本側が反発するのは、もっともなことかもしれない。しかし、発祥地における文化こそが真で、海外に受容されたものは偽とする「決まりごと」に則してウソを断罪することは、それによって異文化が接合する地点で生じているもろもろの特殊事情を抹消することになる。「受容する」ことは、「手を加える」ことに等しいというわけで。想像力の貧困なマスコミが、ネタに窮したあげく、なにをどう騒ごうと勝手ですが、こういうのはおたがいサマなわけですから、「ヘンだねえ、おかしいねえ！」と、互いにその異国情緒というやつをおもしろがるのが、よろしいのであります」(p.19-20。本文より)。つまり、著者は対立物が出会う地点で実際に起きている特殊事情こそ、丹念に拾い上げていくべきだということのである。

本書はある意味で、アンデルセンの童話の中で「王様は裸だよ！」とあどけなく笑って周囲を驚かせた、子供の率直さを思い出させる。馬鹿の目には見えないという王様の服を、皆馬鹿と思われたくないために一生懸命ほめそやすのだが、そのような「決まりごと」に縛られることのない子供はハハハ！と無邪気に笑い飛ばす、あの子供の率直さである。もちろん、この場合の「裸の王様」は、決して中国のことを指しているのではない。むしろ著者は、真と偽の対立的な枠組みを、価値判断の絶対的な基準に置くマスコミや知識人の裸を笑い、そうしたものの見方を無条件に鵜呑みにする人々を笑うのである。

ただし、こうした彼の笑いは、決して天真爛漫な子供の無邪気さによるのではなく、批判精神に満ちた大人の成熟に基づくものである。どこかとぼけたような、彼のユーモラスな文章の奥には、権力の体系に追従するものの欺瞞を見逃さない厳しさが光っている。ほのかなおかし味を湛えつつも洗練された彼の文章を追いながら、掲載された数々の図像を鑑賞しているうちに、次のような情景が目につかんできた。人々が夢中になって王様の衣服について議論していると、どこからともなく、落ち着いた低い声が響いてきた、「王様は、裸なのであります」と。ギョッとして人々が振り返ると、そこにはニコニコと笑みを浮かべた武田仙人が立っている――。

それにしても、本書の中で紹介される、思いもよらぬ絵で人々を驚かせたという呂仙人が、どうしても著者の姿と重なって見えるのは、私だけだろうか。気になるところである。

後藤正憲 (ごとう まさのり)

北海道大学スラブ研究センター特任研究員。専門は文化人類学。研究テーマは、ヴォルガ中流域諸民族の宗教その他の文化的実践。